

2020年7月19日 礼拝説教要旨

詩編講解説教23 「わたしには何も欠けることがない」

詩編23：1～6、ヨハネ10：27～28

詩編第23編から牧歌的な印象を受ける人は案外多いと思います。草原で草を食む羊というのどかな風景がそこにあります。しかしそれは誤解です。4節に「死の陰の谷」とあります。パレスチナの砂漠気候の荒涼とした大地、谷底は昼間でも暗く、またオオカミなどの獰猛な野生動物が多く生息している。絶えず死と隣り合わせの場所が「死の陰の谷」であり、それが他にもないこの詩の舞台です。また5節には「わたしを苦しめる者」とありますから、敵が潜み、命を脅かしている。この詩人はそういう現実には晒されているということです。これは決してのどかな風景ではありません。

加えて、ここには一つの比喩があります。1節「主は羊飼ひ」ということは、「わたし」は羊であるということです。ここで羊という動物の説明をするわけですが、羊というのは何より迷いやすい動物とされています。イザヤ書の御言葉を思い出します。「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った」（イザヤ53：6）動物には帰巢（きそう）本能というのがあります。巣に帰ってくる。鳥も驚くべき帰巢本能があります。渡り鳥は何千キロと旅をして、また同じところに戻ってきます。魚もそうでしょう。海から川に帰ってくる。犬も飼ひ主のところに戻ってくるがあります。ところが羊はこれが発達していない。出て行ったらそれっきり帰ってこないのです。

さらに、この羊の特性として、これもよく説明されるのが、羊は目が悪いということです。前のものしか見えていない。目先のことに捕われて、それで群れから外れるのです。昔からありますが今でも教会学校で歌われる「ちいさいひつじが」という讃美歌があります。「小さい羊が家を離れ、ある日、遠くへ遊びに行き、花咲く野原のおもしろさに、帰る道さえ、忘れまして」目の前のことに夢中になり、気がついたら群れから外れ、迷い出してしまう。この讃美歌の題材となった譬え話は主イエスが語られた百匹の羊の話です。百匹のうちの一匹が迷い出た。羊飼ひはその迷い出た一匹をどこまでも探しに行くという話です。この迷い出るといことが、神さまのところを迷い出してしまうことであり、聖書はそこに人間の罪の本質を見えています。

ここまですら整理しますと、舞台は「死の陰の谷」であり、さらに「わたしを苦しめる者」敵が命を狙う、そういう危険な状況の中で、しかもわたしは迷い出してしまうか弱い羊なのです。そしてそれがまさにわたしたちの現実なのです。半年経ってもなお世界中が新型コロナウイルスの脅威に晒されています。収束どころか、ますます勢いが強くなっています。このウイルスによって、改めてわたしたちはいかに危うい存在であるか、死と隣り合わせであるかを知らされています。この世が「死の陰の谷」であることがよく分かります。「わたしを苦しめる者」サタンは容赦なく、わたしたちに攻撃を仕掛け、神さまから引き離そうと企んでいます。

けれども、そのような現実の中で詩人は言うのです。「わたしには何も欠けることがない」と。それは負け惜しみでしょうか。強がりでしょうか。そうではありません。1節「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない」確かにわたしは羊であり、弱く欠け多い存在です。でも神さまが羊飼ひであるなら、話は別なのです。たとえわたしは欠けだらけでも、「わたしには欠けることがない」と言い切ることができるのです。

羊は羊飼いなしには生きられない存在です。でも羊飼いがいれば食べ物に困ることはない。安心です。神さまが共におられることで、たとえ迷いやすいわたしたちであっても飢え乾くこともなく、安心なのです。さらに「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」（4節）どんなに危険な状況であろうと、神さまはわたしたちを守り、力づけてくださる。ここに「鞭」と「杖」とあります。鞭は先に鉄の金具の付いたこん棒と言われます。それは敵を追い払うための武器です。また杖は羊を誘導するときに使ったと言われます。先の曲がった杖で迷った羊を引っ掛けて群れに戻したり、先頭の羊を杖で導いて方向付けをします。そのように羊飼いは敵を追い払い、正しい道に導く存在なのです。だからこそ羊は羊飼いを信頼して安心なのです。

そしてこの羊飼いかそわたしたちの主イエス・キリストに他なりません。福音書には主イエスが「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（マタイ9：36）と書いてあります。その主の憐れみは、主ご自身が羊飼いとしてわたしたちを養い、そして迷い出てしまったわたしたちを神さまのところへ連れ戻すという形になって現されました。イエス・キリストは言われます。「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（ヨハネ10：11）その通り、良い羊飼いです。迷い出たわたしたちを探し出してくださるために、この世に来られ、そして最後は十字架で死なれました。神さまと完全に切り離された陰府にまで降られ、わたしたちを探しに来られたのです。そのように羊のために命を捨てて、死の中までもわたしたちを探される。そしてキリストは三日目によみがえられ、迷い出たわたしたちを父なる神さまのもとに連れ帰られるのです。「主の家にはわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう」（6節）

そしてもう一つ、大切な意味があります。「あなたはわたしに食卓を整えてくださる」（5節）ここには命の糧、魂の養いがあります。「主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」（2～3節）そのために主はご自身の命を十字架で差し出されました。その命をもってわたしたちを養われるのです。初代教会の時代、この詩編は聖餐において読まれたと伝えられています。主が羊飼いです。十字架でその命を差し出してわたしたちを養ってください。主がその命をもってすべてを満たしてくださいから欠けることはないのです。その恵みと慈しみに支えられて、わたしたちはたとえか弱き羊でも、荒涼とした世の中、死の陰の谷を力強く歩むことができます。

天の父よ。あなたのもとを離れて帰ることができない、迷える子羊です。でもあなたは放って置かれるのではなく、諦めずに独り子を世にお遣わしになられ、どこまでもわたしたちを探し出してください。そして独り子の命をも惜しまず差し出してくださいました。そこに真の養いがあり、だからこそわたしには欠けることがないということ信じさせてください。この世は確かに「死の陰の谷」ですが、どうかあなたに導かれ、養われて、この週も御許に帰る旅路を歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。